

レポート

歯科医師になった鍼灸師が 実践する融合の形

関根陽平氏
(みはる矯正・歯科医院)

photo: 編集部

東京都大田区にある「みはる矯正・歯科医院」院長の関根陽平氏は、歯科医師と鍼灸師の免許を持ち、実際に歯科医院のなかで鍼灸や漢方を取り入れている。もともと鍼灸大学を卒業後、6年間スポーツ現場でトレーナーをしていた関根氏は、選手のケアに携わるうちに「歯科と東洋医学とスポーツを融合したい」との思いが芽生えたという。今回は関根氏が実践する歯科治療と鍼灸の融合について話を聞いた。



▲みはる矯正・歯科医院の外観



▲関根陽平氏

スポーツの現場で見た 「歯」の重要性

東急目黒線と東急大井町線が接続する大岡山駅から徒歩1分の立地にある「みはる矯正・歯科医院」に一歩足を踏み入ると、他の歯科医院にはない特徴に気がつく。院内には消毒液の匂いはなく、むしろ馴染みのある



▲待合室。奥にはキッズスペースも用意されている



▲受付。歯科用品のなかに「クリスマスポット」(セイリン)と一緒に置いてある



▲関根氏がケアを担当した日テレ・ベレーザの選手のサイン入りユニフォーム

灸の香りがするのだ。この歯科医院では開設した2013年から、鍼灸を取り入れた治療を提供している。その方針を打ち立てたのが、院長の関根陽平氏だ。

関根氏は1998年に鍼灸師の免許を取得したのち、スポーツにかかわる仕事をしたいと考えていたとのこと。そして縁があってトレーナーとしてスポーツ選手のケアにあたるなかで、スポーツにおける歯科領域の重要性を痛感したという。

「どうすれば選手のパフォーマンス向上に寄与できるかと考えていたときに、アメリカンフットボールの選手をサポートした際、『歯科治療を受けたあとに調子が上がった気がする』と話をしたことがきっかけで、咬合の改善など、歯科領域へのアプローチにその可能性を感じたんです。それを実現するために、歯科医師になろうと思立ちました」

そして現在、歯科医師の免許を持って東西医学を応用した治療を提供している。歯科医院での鍼灸という構想は歯学部に入学したと

きからあったそうなので、関根氏の治療家としての核となっている。

みはる矯正・歯科医院自体の患者数は月200人ほど。そのうち、鍼灸治療も受ける患者数は平均して30～40人になる。年齢層としては、10代から70代と幅広く、なかでも若い層はスポーツ選手が多い。臨床においては顎関節症や三叉神経痛などの歯科領域の疾患はもとより、鍼灸師ならよく遭遇する腰痛や五十肩、また膝や肘に見られるスポーツ系の疾患といった症例が多いという。普段は歯科治療の一環として鍼灸も取り入れて提供しており、その後のメンテナンスや他院から紹介があった患者といった鍼灸治療のみの場合、30分5,000円でやっている。

「私の専門は矯正歯科治療で、ベースが自費診療であるので、値段設定は比較的スムーズに行えています。一般の歯科の先生の場合、歯科診療は保険で、鍼灸は自費とされている先生がほとんどです。疾患名が違うので、その部分は混合診療にはなりません」

歯科用のユニットで治療する 特徴的なスタイル

院内に漂う灸の香りは、鍼灸院であれば普通でも歯科医院としては異色だ。そのことについて来院する患者はどう思っているのかと聞くと、「やはり最初は驚きますね（笑）」とのことだった。しかし、それが鍼灸に興味を持ってもらうきっかけにもなると考えており、あえて灸の香りがしていたり、鍼を受付などに展示し、自然と視界に入るようにしている。もとより、来院する患者は事前にホームページを見ている場合が多く、この歯科医院では東洋医学を取り入れていることを知ったうえで、治療を希望して来るとのこと。

関根氏の場合、臨床の現場もユニークで、普段患者が歯科治療を受けるために座る歯科用のユニットで座位姿勢のまま治療を行う。背部の治療については、背もたれのない椅子に移ってもらい、やはり座位姿勢のまま治療する。その理由を聞くと、「必要に応じて歯科視点的な視点で診察ができるんです」と答えた。



▲鍼灸治療も歯科用のユニットで行われる

一方、デメリットとしては患者がのぼせやすいという点が挙げられる。特に歯科疾患に関連する治療の場合、顎顔面領域の治療が多くなるためより血液が上りやすい。そのため、関根氏はまず下肢の治療から始めることで血流を下肢に向け、それから徐々に上肢へと施術部位を移してのぼせるリスクを減らしている。

今回撮影にご協力いただいた患者は歯科医師であり、主訴は三叉神経痛（詳しい症例報告は特集●を参照）。症状はほとんど落ち着いているが、初期の頃はあくびをただけでも痛みを感じるなど日常生活に影響が出ており、その頃は治療の頻度も週に1回程度だった。今は血流改善や疼痛のコントロールなどを目的とした治療を月1回ほどの頻度で受けている。この患者の場合、歯科医師という職業上、同じ姿勢を維持する時間が長いいため、負担のかかる足や腰などのメンテナンスも兼ねている。

主訴の三叉神経痛は歯科医師の領域でもあり、通常「テグレトール」というてんかん用の薬を処方するそう。にもかかわらず、あえて鍼灸治



▲治療は下肢から上肢に向かって順に行っていく。そうすることでのぼせのリスクを減らしている



▲治療には棒灸のほか、電子温灸も用いる



▲背部への治療は背もたれのない椅子に移って行う

療を選んだ理由について患者に聞いた。

「テグレトールを服用すると、副作用で眠気が出てくるんです。かといって手術をするほどの痛みでもない。漢方薬も効果があるときはあるのですが、以前、中国の鍼灸師に鍼をしてもらい、症状が改善したことがあったので、やはり鍼で治療しようと思いました」

患者は日本歯科東洋医学会に所属しており、鍼灸の講演を聴講するなどとも東洋医学への関心があったという。そして同じ学会に所属していた関根氏に自身の症状について相談したことをきっかけに、治療を受けるようになった。症状は2～3回でほとんど収まり、以来、メンテナンスのため定期的に通院している。

歯科医師と鍼灸師の 連携に見出す患者のメリット

関根氏のように鍼灸師で歯科医師の免許を持っているというケースは稀かもしれないが、鍼灸治療自体はほかの鍼灸師が行うものと同様であり、何も歯科医師の免許を持っていないければ、歯科領域で鍼灸師が活躍できないと

いうわけではないことが分かった。その分、歯科医師との連携が大きくかかわってくるだろう。では実際に、両者が共存していくための連携に求められることは何か、関根氏に聞いた。

「お互いの言語、ルールを共有すること、そして共通の時間をつくることです。まず、歯科医師に鍼灸を理解してもらうだけではなく、鍼灸師もまた歯科医師、歯科領域のことを理解していなければなりません。それから、もちろん鍼灸師として技術を高めることは大切ですが、やはりお互いに人ですので、なるべく同じ場所で同じ時間を過ごし、信頼を得ることも必要ですね」

まさしく今回の患者がそうであるように、学会などの場所で時間を共有することで、「相談し合う」信頼関係が構築されていく。関根氏は日本歯科東洋医学会の理事でもあり、前述（p.30を参照）のように歯科医師に向けた鍼灸の研修会を担当している。

鍼灸にできることを歯科医師に知ってもらうことで、歯科医師と鍼灸師との連携につながっていく。関根氏は「これからも双方がうまく一緒に歩ける道を探していきたいです」と語った。